

# 危機言語について

鈴木雅光

*The sum of human wisdom is not contained in any one language, and no single language is capable of expressing all forms and degrees of human comprehension.*

— Ezra Pound

(人間の知恵の総体は、たった一つの言語に内包されるものではないし、人間理解のすべての形式と段階を表現し得る言語は一つも存在しない)

- 1 はじめに
- 2 保存運動
- 3 消滅の要因
- 4 話者の数
- 5 記録がないと消滅する
- 6 異文化同化
- 7 まとめ

## 1 はじめに

1992年、アメリカの言語学者 Michael Krauss は、世界にある約 6,000 言語のうち半数が 100 年以内に使用されなくなるだろうと予想した。この予想は言語学者たちに衝撃を与えた。

国連環境計画 (UNEP: United Nations Environment Program) によると、世界の言語の数は 5,000 から 7,000 と見積もられている。そのうち 1,500 以上

の言語が1,000人以下の話し手しかいない。553の言語については、話し手が100人以下である。驚くべきことに、世界の言語の約半数が21世紀に消える可能性があると言われている。それは人類の歴史が記録されて来てから前例のない喪失の割合であり、平均して2週間かそこらで1つの言語が消えていくことになる<sup>11)</sup>。

このことに関しては1990年代から大きく話題になったが、ほとんどの人々はこの事実に気付いていない。動植物の種の絶滅や環境運動と関連のある生物学上の損失については、人々は誰もが知っているのだが、これに比較すれば、言語の消滅はまだ人々の関心にのぼることは、ほとんどないと言ってもよい。

本稿は、David Crystal (2004) の *Language Revolution* にある *Language in danger* (pp. 47-57) の項を引用・紹介し、消滅の危機に瀕している言語の問題を考察する。

## 2 保存運動

1990年代からはユネスコの強力な後押しもあり、世界の言語の多様性に対する関心は、少しずつだが確実に高まって来ている。特に、ヨーロッパは少数言語の問題に積極的に関わって来ており、数十年の経験がある。ヨーロッパにはその経験のノウハウを伝える政治的あるいは行政的基盤がある。

ウェールズ語、ゲール語、カタロニア語、ロマンシュ語などの少数言語は手厚く保護されて来た。例えば、ウェールズ語は19世紀には学校などで話すことが禁止され (= Welsh Not)、話者人口は減少したが、20世紀になると保存運動により息を吹き返すことになる。

ロマンシュ語は、スイスの人口746万人のうちわずか0.5%の話者しかいないのに、1939年から、ドイツ語、フランス語、イタリア語と同じように国語の地位を与えられている。このような例は、ヨーロッパ以外の国々にとっ

特に1992年制定の欧州憲章(European Charter for Regional Minority Languages)と、言語を第一の焦点とした1996年のバルセロナ宣言(Barcelona Declaration of Linguistic Rights)は決定的であった。そして言語消滅に関して考える機関の多くが1990年代に設立された。例えば、UK's Foundation for Endangerment Languages(危機言語基金)やInternational Hearing House for Endangered Languages(国際危機言語情報センター)のような機関である。

国連総会は、2008年を「国際言語年」(International Year of Languages 2008)と宣言した。"Languages matter"(言語は大切だ)という考え方から、ユネスコが地球上に存在する言語に光を当て、特に消滅の危機に瀕している言語の保護と促進を呼びかけている。複数言語主義は、平和共存と相互理解としての価値があるという理念からである。

フランスのシラク元大統領は「平和のために行動する」という目標を掲げ、2008年6月にシラク財団を創設した。財団は優先補助分野として4つあげているが、その1つに言語と文化の保護がある。

しかし言語の保存運動は、約半世紀に渡って力を蓄えて来た環境運動と比べてみると、つい最近始まったばかりである。約半分の言語が今世紀中に消えると言っていることを、生物の種が半分消えてなくなると誰も言っていないことと比べてみると、言語の消滅の規模の大きさや速度がずっと深刻な問題であるのが分かる。

### 3 消滅の要因

グローバル語の到来と言語消滅の割合が増大した関係は、少数言語に対する優位言語の影響力が世界的な関心事となっているために、よく言及されている。中でも英語の役割が特に関係があるとされる。

確かに北米とオーストラリアでは英語の影響力は甚大であった。北米では土着言語は187あったが、英語が支配的なため現在では149の言語が瀕死の状態にあるという。これは土着言語全体の80%であるから驚きである。

オーストラリアでも土着言語は250語あったが、実に土着言語の90%が消滅寸前となっている<sup>(1)</sup>。

しかし、北米とオーストラリア以外の地域では、英語ではなく英語以外の多数派の言語が関係している。例えば、南米のスペイン語とポルトガル語、北アジアのロシア語、北アフリカのアラビア語、中国の中国語は、その地域の少数言語の消滅に大きな影響を与えている。アフリカでは部族間の対立による言語消滅もある。従って、グローバル語としての英語の成長は、言語の危機を説明する際の唯一の要因ではないのである。

なぜこのように多くの言語が消失しているのか。その理由としては、自然災害から虐殺までである。孤立した地域の小さな共同体は、地震、津波、火山の噴火などで、多くの人々が死んだ。植民地時代に白人によって持ち込まれた病気のため、植民地の人口が激減した。

歴史的に見てみると、南米や北米に最初のヨーロッパ人が到着して200年で、先住民の人口の90%以上が、動物や人間によって持ち込まれた疫病によって、亡くなったと考えられている。

スペイン人が到着したとき、中央メキシコの人口は1518年には2,500万人以上あったが、1620年には150万人に落ち込んだ。新世界の人口は、ヨーロッパ人と接触する前は1億人もあったのに、200年以内に、人口は100万人以下に下がった。これは、14世紀のヨーロッパで黒死病で死んだと思われる2,500万人をはるかに越えている。2つの世界大戦での死者の数(約3,000万から4,000万)をもずっと越えている。当時の天然痘、今日のエイズをも越えているのである。

20世紀でも同じことが起きている。「白いブランコが『進歩』を持って来た。進歩と一緒に、病気や災いが来た」というように、白いブランコ(=白人)がもたらした伝染病で、1915年に2万人いた南米のナンピクワラ族は1938年には約2千人に激減した<sup>(3)</sup>。

先住民の自然資源が外からの搾取に陥りやすい世界の地域では、地元の

人々に対する影響は破壊的である。アマゾンの熱帯雨林共同体の扱いは、国際的な非難の対象となっている。先住民の土地の権利を保障しようという数十年の努力にもかかわらず、民族虐殺や移住の報告は依然として起こっている。アフリカでは民族対立や宗教的対立で大量虐殺が起これ、共同体が崩壊し幾つもの言語が消滅した。

優勢言語への同化も言語消滅の原因である。国の言語政策によって、公用語として優勢な言語が出現すると、それに対して、少数言語共同体は、政治的、経済的、及び社会的に同化していき、伝統的な文化や慣習が急速に衰退していく。また、共同体の人々の優勢言語への憧れと劣性言語への否定的な姿勢もある。自分たちの言語を使うことへの劣等感や恥ずかしさから、自らの言語を諦めるのである。最後には、国際市場に同化してしまう。これは「異文化同化」と呼ばれているが、これに関しては6節で詳しく採り上げる。

以上のように、言語消滅の理由は、自然災害、疫病、紛争、及び異文化同化など様々でありまた複雑である。

#### 4 話者の数

世界の言語約 6,000 のうち、その約半数は 8 カ国に集中している。同一国内に言語を多く有している順に並べると、パプアニューギニア (832)、インドネシア (731)、ナイジェリア (515)、インド (400)、メキシコ (295)、カメルーン (286)、オーストラリア (268)、そしてブラジル (234) になる。このわずかに 8 カ国で 3,651 言語が存在することになる。そして、専門家の試算によると、6,000 言語の約半数が 21 世紀に消滅するという。

話者数が 1 億人以上いる言語は、中国語、スペイン語、英語、ベンガル語、ヒンディー語、ポルトガル語、ロシア語、及び日本語の 8 言語だけで、これらの 8 言語で 24 億人近くの話者数となる<sup>(4)</sup>。話者の数の大きさからして、このような言語は衰退することは当分考えられないだろう。

これに対して、話者が 100 人あるいは 1,000 人より少ない言語は、あまり

長くは存続しないかもしれない。1999年の*Ethnologue*<sup>(5)</sup>によると、たった1人の話者しか残されていない言語は51言語あった。そのうちの半数以上の28言語はオーストラリアのみである。話者数と言語数の関係は次のようになっている。言語の数は概算である。

100人以内	500言語
1,000人以内	1,500言語
10,000人以内	3,000言語
100,000人以内	5,000言語

実に世界の言語の96%が全人口の4%によって話されているのである。故に、多くの言語が危機に瀕していると言っても、驚くことではないのである。

では話者の数が何人いれば安全かという疑問が生じる。10万人は安全だろうか。10万人の言語はすぐにはなくなるまいだろう。しかし、2～3世代生き続けるというという保証もないのである。

言語消滅には外からの圧力、あるいは内からの圧力がある。外からの圧力としては、別言語の支配からの危機があるかどうかである。内からの圧力としては、その言語を話す人々の姿勢による。彼らの言語が生きるのか死ぬのかを彼らが気にかけているのかが重要となる。いったんある言語が共同体から最後の話者を失うと、不可能ではないにしても、復活させるのはかなり困難を伴うものである<sup>(6)</sup>。

Crystal(2000: 13)によれば、アフリカでは、話者700万人のショナ語(Shona)、600万人のアフリカーンス語(Afrikaans)、110万のンデベレ語(Ndebele)の話者ですら、英語を目の前にして、自分たちの言語に不安を示したという。このようなことから、話者の数が少ない言語は危機に陥りやすいが、話者の数が多ければその言語が安泰であるということにもならないことが分かる。

## 5 記録がないと消滅する

どういう言語が消滅の危機に陥りやすいかに関しては、文字を持っていない言語であると明確に言うことができるであろう。

ある言語を話す最後の人が消滅したらその言語は消滅する。しかし、何らかの方法で書き記されると、最後の人が死んでもその言語は生き続けることになる。だが、現在でも言語の約3分の1、約2,000言語が、依然として記録されていないという。

人は死ぬと、住居、埋葬塚、あるいは文化遺物のような形として、世の中に存在していたという印を残すが、話し言葉は消滅すると何も残さない。記録されたことのない言語が死ぬと、その言語はまるで全く存在しなかったようになるのである。

一つの言語がなくなることに関して、過去を振り返ってみると、それは何も珍しいことではない。共同体は歴史を通じて、現れ発展し衰退して行くのであり、彼らとともに言語もそうである。1906年トルコのボアズキョ村で新たに発見された印欧語族に属するヒッタイト語は、旧約聖書の時代に文明が消えると消え去った。聖書の時代から知られているフリギア語やシュメール語など約60もの言語が同じ運命をたどった。

しかし、言語の消滅に関して、今日我々が直面しているのは、消滅していく言語の数の劇的な多さと速度である。今日起こっていることは、過去の基準に照らして異常なことである。予測のように、世界の言語の半数が1世紀以内に消滅するとすれば、それは歴史上、大規模かつ前例のない言語の滅亡である。言語が死ぬたびに、人類の貴重な財産が失われることになる。そのために消滅する前に記録することが必要である。

しかし、記録には問題点もある。書き記された場合、言語が破壊されると考える住民もいる。口承を文字にした場合、旋律やリズムなど失われるものもある。ある特定の方言が選ばれると、他の方言の人々との不和が生じることもある。このように記録に伴って生じる問題が、記録を遅らせる原因と

もなっているのである。

## 6 異文化同化

言語消失を生じさせている要因は、一民族の身体上の安全とは直接関係ない。共同体の人々は元気であるかもしれないし、また彼らの伝統的な地域に住み続けるかもしれない。にもかかわらず、彼らの言語は衰退し、その結果、他の言語に取って代われ消えてしまうことがある。

これは異文化同化 (cultural assimilation) と言われるものである。劣勢な文化にいる人々がより優勢な文化に影響され、新しい行動と社会的習慣を採用することで、その性格を失い始めることになる。

歴史的に見ると、現在の危機の多くは、500年前に始まった植民地主義 (colonialism) と関係がある。植民地主義は少数の優勢な言語を世界中に広め、その結果、土着の言語が優位言語に同化し、多くの少数言語が失われることになった。北米やオーストラリアのような地域では、英語が多くの原住民の言語を置き換えてしまった。

しかし、英語が劣勢な文化を支配した唯一の言語では決してない。ヨーロッパの植民地主義が唯一の原因ではないのである。アラビア語は北アフリカの多くの言語を強引につぶした。サハラ砂漠のアフリカでは、地元の部族の帝国建設が常に主要な要因である。

今日、文化的同化を促進する要因はよく知られている。都会化 (urbanization) は田舎の共同体の磁石として機能する都市を生み出し、輸送と通信の発達には田舎の人々が、それに到達するのを容易にした。この種の接触は都会と田舎を均質化する。

南米のスペイン語やポルトガル語、東アフリカの多くの地域でのスワヒリ語、北アフリカのアラビア語、そしてほとんどどの地域でも英語のような支配的な言語を学ぶことは、すぐに都会と田舎の均質化を容易にする。

首都に権力が集中することで田舎の共同体は自治権を失い、また彼らも



はや自分たちの運命をコントロールできず、田舎の要求が遠くにある政策決定者によって無視されていると気づくとき、しばしば疎外感を感じるようになる。優勢な文化にある言語はどこにでも浸透し、メディア、特にテレビの情け容赦のない日々の圧力で強化される。伝統的な知識と慣習はたちまちのうちに浸食されてしまう<sup>7)</sup>。

一つの文化が別の文化と同化するとき、危機に瀕している言語に与える影響はどこでも同じ傾向を示し、おおよそ3つの段階がある。

第一段階は、支配的な言語を話す共同体の人々に対しての政治的、社会的あるいは経済的な圧力である。それは政府機関や国家機関による勧告あるいは法律の形での「トップダウン」のこともある。あるいは流行か社会の一部を構成する仲間集団の圧力という形での「ボトムアップ」のこともある。あるいは再び、一部にだけ認識されかつ理解されている、社会政治的そして社会経済的要因の間の相互的影響の結果として現れる、明確な方向のないものもある。

しかしその圧力がどこから来ようが、その結果、二カ国語併用の時期が現れて来る。これが第二段階である。古い言語能力を依然として保持しながら、人々は彼らの新しい言語に徐々に有能になっていくような期間である。それから、しばしばあっという間に、この二カ国語併用は廃れ始める。古い言語が新しい言語に道を譲るからである。

このことによって第三の段階がやって来る。そこでは若い世代は新しい言語に有能になり、その言語とともにアイデンティティを確立し、彼らの第一言語が彼らの新しい要求に関係が少なくなっているということを知る。これには、子供たちのみならず親にとっても、しばしば、古い言語を使うことが恥ずかしいと感じることを伴う。親は子供たちにあるいは子供たちの前で、古い言葉を次第に使わなくなる。新しい社会にさらに子供たちが生まれるようになると、親たちは彼らにその言葉を使う機会がいつそう少なくなる。

その言葉を使い続けている家庭は、話す相手の家族が少なくなっている

ことに気付く。そして彼ら自身の使い方が、内向きで個人的な特徴となっていて、その結果「家族の方言」(family dialect)となっていく。家の外では、子供たちはお互いその言葉で話すのを止める。1世代から時々10年以内で、家族の中の健全な二カ国語併用は人前を気にするセミリンガリズムになってしまい、その言語を絶滅の一手手前におくモノリンガリズムになってしまう。

このようにしてある文化が優勢な文化に浸食され、やがては優勢な文化に同化してしまうのである。少数言語の消滅は globalization の加速度的進行で、歴史上前例のない浸食にあっている。

## 7 まとめ

*Language in danger* は10頁ほどの文書であるが、そこで述べられていることは、21世紀に生きる我々にとっては極めて意味の重いものである。今世紀に世界の言語の約半数が消滅するのではないかという懸念から始まって、言語の支援活動、言語が消滅する要因、特に文化的浸食による異文化同化(cultural assimilation)の問題を述べている。

本稿は、*Language in danger* を引用・紹介し、危機言語の問題を考察した。本稿で述べたことをまとめると次のようになる。

- ①危機言語の保護活動は環境運動ほどではない。
- ②危機言語の消滅の要因は自然災害から虐殺まで様々である。
- ③危機に陥りやすい言語は必ずしも話者の数ではない。
- ④危機に陥りやすい言語は文字を持っていない言語である。
- ⑤優勢な文化への同化は劣勢な文化の言語消滅を早める。

(注)

- (1) Crystal(2000: 19)
- (2) Crystal(2000: 87)

- (3) 朝日新聞夕刊 (2008 年 10 月 3 日)
- (4) Crystal(2000: 14)
- (5) *Ethnologue* は、キリスト教系の少数言語の研究団体である国際 SIL(Summer Institute of Linguistics) の公開しているウェブサイトおよび出版物である。
- (6) 一度死語となったヘブライ語は、イスラエルで母語として復活している。
- (7) Crystal(2004: 55-56)

## REFERENCES

- Crystal, David. 2000. *Language Death*. London: Cambridge University Press.
- Crystal, David. 2004. *Language Revolution*. London: Cambridge University Press.
- Phillipson, Robert. 1992. *Linguistic Imperialism*. London: Oxford University Press.